

第十一章 隱退・死去

明治四十四年・一九一一年八月二十五日、首相桂は病と称して骸骨を乞い、三十日に西園寺内閣が代つて成立し、小村も第二次外相の印綬を帯びてから正に三年と三日で、桂と共に台閣を退いた。その辞表を捧呈した日に、別に在職中施設した重要政務経過の概要を具して乙夜の覽に供したが、その中で韓国併合と外交とに關する事項は、同時に小村の功績を闕下に奏聞した最後のものではあつた。

桂内閣総辭職の翌八月二十六日政友会の原敬は後継内閣に關し桂と種々内談を遂げたが、其の際桂は小村外相は天皇が留任を まれる思召のようであると原に語つた。原の何か留任を必要とする事情ありやとの反問に對し、別に無しと桂は答えたが、「此事は何か小村を留任せしめなき内情あるか又は林董が後任者として入る事を拒むが為めか、其辺の事情より桂又は山県より内々陛下に言上したるかと思はるゝなり」と原は日記に誌してゐる。八月二十八日西園寺政友会総裁が組閣の天命を受け参内謁見の際、桂の内談の如く小村留任の御話があつたが、西園寺は小村ならずとも外交官中より選任すれば差支えなく、又病身であるので此際更任した方がよいと上奏し、小村外相の留任は沙汰止みとなつたのである。（原敬日記）

翌九月初旬、小村は東京を去つて葉山に移つた。小村は葉山退隱後、見舞に來た本多熊太郎に、此の冬は熱海にでも行つて長い間の懸案である日露戦争の外交経緯の正確な記録を作りたいとの意向を洩らしたのであるが、遂に実現

に至らなかつた。碧海前にあり、松籬後に和する辺、質素な丘腹の小屋、これが小村の別墅である。別墅というも、別に本邸があるのではなく、こゝが唯一の棲居である。彼は自家には修理の煩があり、納税の責があり、借家の気楽なるに若かずと人に語つたことがあるが、遂に終生自己所有の邸宅を構えなかつた。日露戦争当時、人に勧められて小邸を小石川の原町に購うたが、これは専ら病弱の夫人を静養せしめるためで、自身は遂にこれに入らなかつた。これを購入した時も、自身その邸宅を実見したのではない。小村はボーツマスの大任を終え、次で北京に使し、帰朝して外相の職を解かれた日、少閑を偷んで始めて往いて自邸を一見したのが最初で、かつ恐くは最後であつたであろう。その夜小村は霞ヶ関の大小吏員一同を三井俱樂部に招き、告別勞々戦時精勵に對する慰勞の宴を催したが、席上小村は傍に坐せる帰朝中の一公客を顧み、当日初めて原町に往き、狭き街衢に迷える官の馬車を驚異視せる街頭の一巡査に我家の所在を尋ね、漸くにしてわかつたことを語つて笑い崩れたことがある。故に小村は一家を所有するとはいえ、実は家なきも同様で、その在京中、官邸以外には概ね帝國ホテルを以て家とした。

葉山の別墅とても、自身の邸宅ではなく一借家で、家賃年に三百円に過ぎない一小屋である。梁は傾き庇は歪み、檣先き三步で断崖の崩れかゝつた一陋屋である。しかし彼は葉山の風光を愛した。底前は一望碧油の如き相模灣、伊豆の大島は烟霞渺茫の間に呼べは遙に応えんとし、左には長者カ鼻の小岬波先の間に翠を凝らし、右には乱松青空に映じて濤風に和し、丘下には菜畦麦畝、趣致を添え、春の杜鵑、晩秋の紅葉、夏涼冬暖、山容水態と共に深く小村の心に適し、こゝに愛着すること既に十年に及んだ。晩年には官邸より出で、土曜日曜にかけこの隱宅に神仙の如く、禪僧の如くに過すことを唯一の慰藉とした。伴うものとしては従僕一名、携うる物は書籍教巻、一国の外務大臣も宛然

一介の老書生である。小村は退職と共にこゝに移つて閑居した。室数大小総じて六、主な室は八疊続きの二間で、その東南面の角坐敷を書斎に充てた。中央に紫檀の角机、一間巾の廊椽に籐製の長椅子、肘掛椅子、或は座し、或は仰いで書巻を開し、倦めば渺々たる海面を眺め、蒼々たる近峰を望み、厭けば眼を閉ぢて精思冥想に耽つた。以前は時々庭に出て紫陽花の咲き乱れる仙人掌の間を逍遙し、時には軽き鉄亜鈴を手にして少時運動を真似したこともあつたが、退職後はそれすら廢して殆んど戸外に出なかつた。日常の飲食は淡白清鮮、屋は葡萄酒二盞、晩に和酒五勺に気分を晴すのみであつた。莫は和洋共にこれを嗜み、煙管を手にすれば、灰壺をしたゝか強く敲く癖があり、何か興の湧いたときは一層強打するので、灰吹は真二つに割るゝこともあつた。書架の文籍には、和書に二三の歴史物、洋書に欧米の多くは時事に関する新刊書数冊駢立してあつた位で、これで小村の趣味嗜好の一端が窺える。

小村は家庭の慰安なく、またその慰安を求むる念もなく、読書以外に耳目の道楽とはなく、書画を愛玩するでもなく、骨董を弄せず、園芸に親まず、英詩は誦すれども和漢の詩歌は詠じない。小村の先輩陸奥は国学者の自得翁を父として幼少より文藻があり、獄中の著作「利学正宗」の外「福堂遺稿」という詩集もあつたが、小村にはこの類の風流韻事は求めて得られないし、又その余暇もなかつた。小村は馬琴の文を好んだと聞か、好むも耽る迄には到らず、時には小閑を開基に銷したこともあつたが、これとても策杖を何程にか脱し居たとも思えず、曾て「僕の基の好対手は鄭（永邦）だ、鄭は僕より少々上手だ。しかし鄭との手合はせが一番面白い。勝とうと思えば悪口さえつけばキツと勝てる。鄭がむきになつて怒つて来るから」といつたが、これは口舌の雄の常套手段で、冷静の実力家に対しては、この奇襲も必勝を期し得ない。壮時には大に飲み、大に語り、興到れば時には一二の俗謡を低唱して人を驚

したこともあつたが、驚くよりも多くは坐を逃出したという話でその程度が察せられる。幼少の折には演劇を好んだとの説もあるが、後年家を成してから、小村の家庭には芝居の空氣が横溢していたようで、榎本氏の著書に「私（著者）が水道町の家庭を最も強く連想する点は芝居である。奥さんの趣味の最も深かつたのも芝居である。子供さんの遊戲も芝居、玩具も芝居、錦画も芝居、画本も芝居、何でもかでも芝居尽しであつた。新聞も芝居の記事の多いのであつた」。小村は幼少開成学校に在つた折には、英文教師ハウスに随伴して案内兼通弁旁々、当時浅草の馬道裏に在つた猿若座を一再觀覽したこともあつたと聞けば、劇にはまんざらの門外漢でなかつたかと思われる。尤も小村は夙に家庭の人でなかつたので劇について夫人との間に幾許の共鳴があつたかは知らぬ。しかも小村は東西の劇には相當の智識を有し、ロンドンに大使として居た頃、蓄音機の勦進帳を聴きつゝ唄句の誤を匡して属員を驚かした愛嬌談もある。されど外相となつて後は、国事に忙しくして觀劇の余暇などは全くなかつた。晩年には多少刀剣の趣味に入り特に堀川国広の作を愛翫したように見えた。国広は小村と同じく飢肥の出で、山城の堀川に住し、新刀の名工として首位に推されたもので、本阿弥光遜の「日本刀」にはその双文の働きの特徴を記し「玉焼飛焼多く沸荒くつき湯走りもあり働盛にして」とあるのは、小村の外交に対比して面白い。要するに全身ただこれ公事、常に職務を以て慰藉とし、それで僅に体軀を支えるという姿であつた。小村の全趣味、全嗜好は一に公務そのものであつたというも失当でない。

由来小村は石心鉄腸の人であつたが、その體質は生来剛健ではなかつた。その生れ落つると共に母堂は久しく病牀に臥し、自ら乳を与うることができなかつた。当時牛乳はまだ世に用いられていなかったから、貰い乳や飯汁で辛う

じて小村を哺育したそうである。そのため、幼少の時から極めてか弱く、七歳で振徳堂に学ぶ頃になつて漸く健康を得たが、その健康も尋常の程度に止まり、細つそりと瘦せた体質は絶大の脳力に伴わない憾があつた。殊に明治三十四年十月肋膜炎を疾んで以来、寒暑の変化には大に警戒を要した。しかも劇務は年一年に加わり、別して三十八年には講和談判の重任を終えてポーツマスよりニューヨークに還ると、直ぐ病を冒して特に大統領を華府に訪い、戦後の重要問題に關し充分の諒解を遂げ、苦惱を忍んで再びニューヨークに歸つたが発熱高くして、遂に入院の已むなきに至つた。而して小康を得るや押して米國を出発し、帰朝後養病の追もなく、更に衰弱の躬を以て直ちに沍寒を冒して北京に使用するなど、当年の隨員をして小村の鉄石の意思に深く驚嘆せしめたが、その頃よりして元氣は依然旺盛なるも、健康は漸く衰退の状を呈して来た。壮時寧ろ酒豪として聞え、痛飲宵を徹してしかも翌朝は定刻必ず登庁し、事務を視て倦む色がなかつたことは、同僚の驚異した所で、その次官たりし時、よく小村に伴われて酒戦をやつた時の通商局長、後の外務大臣内田は或夜小村に「兄は瘦軀、故に酒は咽喉から膀胱に素通りするだけだが、僕は肥満、故に芳醇恰く体内を循環する。兄は斗酒を傾けても平然として居るが、僕は数盞で既に陶然となるのも固より怪むに足りない」といつて容易に兎を脱がなかつたことがある。晩年には保健のために努めて飲を節し、特に和酒は成るべく口にしないで、専らライン・ワインを少量に用いたが、飲もうと思えば飲み得ない口ではない。されば三十九年七月、駐英大使として帝都を發するに先だち、告別のため桂を三田私邸の病床に訪うた際、桂は却つて小村の健康を氣遣い、「願くは節酒あれ」の一言を特に小村に饒した。以て小村の当年の羸軀が察せられる。降つて四十二年五月、第二次桂内閣の第二次外相であつた時、小村は肋膜炎を患ひ、医戒に従つて旬日の海上旅行を九州方面に試みた

が、その間にあつても、尋常の保養專一と異なり、炎暑焼くが如き際にも拘らず、努めて九州各地の工業及び港灣の狀態を視察し、特に三池炭坑、三菱造船所、枝光製鉄所は限なく巡視し、当時目睫の案件であつた關稅改正の參考資料を採るに寧時がなかつた。小村は外国勤務時代にも、任国の諸工場を視察することは度々あつたので、小村が平素如何に産業上に着眼していたかゞ解かる。その九州巡遊中に、案内の係員に対して試みた質問のよく肯綮に中り要領を得たのには隨行者も頗る驚いたということである。然るに當時政府は滿洲懸案の解決に忙しく、殊に安奉線改築問題に關し清國に手詰めの談判を為す際であつたので、充分の静養をする遑なくして歸京し、直ぐ劇務に執筆した。尋で翌四十四年八月には肋膜炎に罹り、二回の手術を受けた。心身の疲憊深く察するに余りがある。されど公事以外に何物もない小村の如きは、劇職ありてすなわち心身の緊張を見、閑散になれば却つて衰弱を来すかも知れないので、四十四年八月の退隱後、桂その他旧閣僚は小村の健康の將來について一倍の憂慮を禁じ得なかつた。小村も國務を離るゝの日は疾病を迎うるの日と当時既に自覺したらしく、従来の健康に無頓着であつたにも似ず努めて自ら養生を加え、身の自愛を圖つた。

けれども人事命あり、天寿如何ともすべからず、彼は葉山に移つてから旬余にして氣分漸く勝れず、食欲不振の狀であつた。十一月に入り多少の熱も加わつた。その二日、不日奉天に赴任する落合總領事（謙太郎）が暇乞に来た。平素部下門弟に対しても常に端坐正容、會て膝を崩さない小村も、この日は籐の長椅子に横わつて談を交え、時々疲勞に堪えざる様子もあつた。落合は名医について受診せらるよう勧めたが「熱でも下つてから見せよう」と笑つて答え、重ねて自愛加餐を乞うたところ「ヤー放つて置いて下さ」と答えて稍々五月蠅いといふ風な感をも示した。彼

は午餐を共にし、やがて辞去する際には緩くお話しなさいという処なるも、この日は別に引留めもせず、その辞するが儘に自愛健康を囑して去らしめたのは、自身倦憊の如何に甚しかつたかが察せられる。

踰えて数日ならざるに、肺部に苦悶を感じ、発熱や上昇した。玉井医師来診して切に静臥を勧め、十一日小村は遂に病床についた。十三、四日の交より熱度は進んで退かない。されど小村は床上なお書籍雑誌を手にし、特にテニソンの詩集を愛誦し、または会心の訪問客を捉えて談笑諧謔、病患の身にあるを知らざるものゝ如くであつた。一日同窓の旧友杉浦重剛翁が見舞に來た。小村は大に喜び、籐椅子に安臥し、侍人を遠ざけ、往事を語り混々として尽きない。翁は小村に同窓の菊地（武夫）の病状を告げたところ、小村はいう「肺患は僕の方が先輩だ、菊地の発病は新參だ、当分は大丈夫だろう」と語つた。（菊地は翌四十五年七月に逝いた。談は人物月旦に及んだ。小村またいう、「伊藤にも山県にも桂にも後継者のないのは惜むべきだ。後継者がいないから、その人が没すればその業が絶える。大事業を為すものは後継者を作り置く必要がある」と。彼の翻訳局長時代に、外相大隈は一夕時の廟堂大官及び部下を招いて宴を催し、余興に故三遊亭円朝の落語があつた。終つて枢相伊藤は円朝を招き、盃を与えようとしたが、円朝は忸怩として進まない。小村傍より彼を励まし、「遠慮しなくてもよい、足下ほど豪い者はこの席にいない、大臣大將には後継者雲の如く扣ゆるも、足下は海内独歩、百歳の後よく足下を襲ぐものはなからう、誰かこの席で足下に及ぶものぞ」といつて例に依り噱然哄笑したので円朝は、深く感に打たれたことがある。晩年身国政から退くに及んで、また真箇の国家棟梁の材に乏しきを感じたのかも知れぬ。杉浦翁は今小村のこの歎を聴き、笑つて問うた「兄の後継者は如何」と。小村の語少しくと切れ、程なくして曰く、「先づ山座に伊集院か。安心して成仏が出来るよ」と。伊

集院は重厚摯実で氣宇宏大、同僚推して社稷の臣と称した。山座は英邁の材を抱いて間もなく駐支公使として惜しくも北京で客死した。泉下の小村に於ても如何許りの遺憾なりしぞ。

二十二日に至り、小村は俄に頭部強勁症状に苦む様子があつたが、一夜を過ぎては脳膜炎初期の徴を呈し、また尿閉症を起し、安眠が出来ず、時には意識に明瞭を欠いた。二十四日桂と寺内は見舞に來た。これより先九月二十九日、桂は旧閣僚を三田の私邸に請じ、一夕の宴を張つた。小村もこれに参し、談笑常に倍してはづんだ。同夜彼は帝國ホテルに投じ、翌日葉山に帰つた。爾來遂に再び上京せず。葉山では一再桂をその別墅に訪ひ、殊に十月二十一日往訪の際には、主人の桂と支那問題について大に語る所があつた。小村の桂と相語つたのはこれを最後とし、桂が十一月二十四日に小村を病床に尋ねた折には、もはや多年刎頸の政友たる桂と語を交ゆることも出来ない容態で、床側に坐つた桂は痛憂に打沈み、切哀の歎歎を嚙るのみであつた。山不_レ得_レ水不_レ生動_二石不_レ得_レ樹不_レ蒼潤_一で、桂のために水たり樹たりし小村の今やまさに涸涸せんとするのに接した彼が胸中万斛の愁悶察するに余りがある。

同二十四日宮中から、御思召を以て侍医を差遣わされ、同夜皇儲殿下からも御見舞品の下賜があつた。翌二十五日は朝来呻吟苦惱、呼吸漸く困難を感じ、多少の意識はあつたが險惡の狀態は刻々加わつた。旧友浜尾、穗積、杉浦、長谷川の諸士は、急電に接して葉山に映問した。長谷川は既往数年来小村と国事に關して所見を異にし、やゝもすれば小村を罵倒して憚らなかつた。同年五月、荻原通商局長の病歿するや、長谷川は小村と偶然その弔問に落ち合ひ、久々に談晤し、後に人に「小村も大分話せるようになった」と語つたこともあるが、今その衰え切つた有様を見て涕涙に堪えず、人をして交情の厚きこと依然旧の如くなるに陪泣せしめた。同日小村は両陛下、伏見宮殿下、有栖川宮

殿下よりの御見舞品を床上に拝したが、薄暮病勢急に革まり、漸く危篤に陥つた。その報天聴に達するや、二十六日特旨を以て位一級被進、従二位に叙せられた。この日払暁、小村は大河の海洋に流れ落つるが如くに他界した。享年五十有七。

喪を發するや朝野驚愕、小村を親しく識ると識らざるを問はず愁傷惋惜せざる者はなく、内外諸新聞紙は挙げて哀悼の辞を捧げ、特に諸外国政府からは、孰れも懇篤なる弔電弔詞を我が政府に寄せ、我が盟邦なる英国の在本邦大使マクドナルドは同二十六日付を以て内田外務大臣に宛て、

「……………本日本国政府の訓電を接受致候處、小村侯爵は英国の日本に対する友誼を敦厚ならしむるに与りて力ありたるを以て、その名は常にこの事を聯想せしむべきに、今本国政府は侯爵薨去の報を聞き痛惜に堪えざる旨を日本政府に伝うべしとのことに有之候。サー・モドワード・グレイはまた一身に於ても、この薨去のために喪う所の極めて大なるを歎する旨を致さんことを依頼し來り候。右の弔詞を寄するに際し、本使もまた館員一同と共に哀悼の意を表し候。侯爵は常に本使並に本館員の親友なりしが故に、いづれも皆その薨去を悲むこと極めて深くして切なるもの有之候。閣下より一同の表する哀悼の至意を侯爵の遺族に致され候得者本懷に存候。……………」

と述べ、在本邦米國大使も翌二十七日付を以て

「……………貴國の卓越なる政治家、外交家たる小村壽太郎侯爵の薨去に対し、最も深厚なる弔意を貴國政府に陳達可致旨本國政府より訓令に接し候。侯爵の我國を熟知せられ、かつ久しく此に在住せられたるは、侯爵をして米國を通じて広く知られ普く敬せらるゝ人たらしむる迄に、我が國民的生命に親近せしめたる趣に有之候。右本國政府の弔詞に加え、國務長官及び本使自身の至大なる哀悼の意を致度……………」

といひ、清國政府も總理大臣袁世凱の名に於て在本邦同國公使を通じて、

「転交日本東京前外相小村侯爵邸第、昨聞侯爵騎箕仙逝、驚愕易勝、侯爵勲業豐隆、譽望彪炳、夙為外交界所推崇、与本大臣尤深契洽、追念旧雨、傷悼弥深、特此電唁、」

との弔電を致し、その他締盟各國の政府、当路者、及び朝野知名の士より或は在本邦当該國代表者を通じて、或は当該任國本邦使臣を経、弔意を致せるもの累積山を作した。二十八日御弔問として兩陛下より松浦侍從及び渡辺皇后主事を差遣わされ、優渥なる御沙汰があつた。米國大統領タフトは、同日鄭重なる花環を靈前に供えた。

葬礼は十二月二日、神式に依り青山葬場に於て行われた。この朝未明、葉山に於て舟入式があり、病床愛護のテニソン詩集と半ば未喫のエヂプト真一罐とは、その儘棺内に収められた。やがて靈柩は親戚故旧に擁せられ、冷なる潮風に送られつゝ丘上の別墅を出た。沿道の村民路傍に佇立し、最後の叩拝を捧げた。柩は逗子駅で鐵道院臨時差立の特別車に移された。發車の汽笛も恨を含んで余韻哀曲に似たものがあつた。やがて列車は新橋駅に着し、プラットホームには惘然として柩車の前に黙礼する者數百人。多年國事を共にした肺腑の契友桂は、進んで靈柩に近づき、嗚咽流涕暫しは顔を挙げ得なかつた。尋で柩は霞ヶ關の外務大臣官邸に入つた。勅使の下向があり、靈前に於て左の聖旨が伝えられた。

御沙汰書

獻猷機ニ合シテ同盟ノ信ヲ通シ締約議ヲ提シテ友邦ノ好ヲ修ム任ニ外交ニ膺リテ功終始アリ計意忍ニ至ル軫悼曷ソ勝ヘム宜シク賜ヒテ以テ吊意スベキ旨御沙汰候事

明治四十四年十二月二日

同二日午後一時半、靈柩は官邸を出で、肅々として青山斎場に向つた。先導の騎馬警官、儀仗兵より真鍮白旗、伶人、神饌、辛櫃、呉床、祭官、斎主、副斎主、銘旗、根越神等型の如くに進行し、聖上、皇后宮、東宮、以下諸皇族の御輦、外務省員十有九名の捧持する内外勳章幾十箇は、小村の偉功を偲ばしめて尽きない。柩の輿丁四十人。寺内、内田、平田、大浦、栗野、後藤の旧僚友は、柩側に列して徒歩し、喪主愁然これに随うた。以下家族、近親、親族、その他の扈從者は数知れない。斎場の諸係は石井外務次官以下省員挙げてこれに当り、用意万端整つて、二時三十分に祭式が行われた。勅使及び皇族御名代、外交団、文武重臣、その他朝野各方面の会葬者、無慮一千有余。慘としていづれも涙に咽ばざるものはなかつた。想えば当時から三十有九年前、大学南校にあつて小村と同窓たり、同齡たり、特に至尊陛下の御臨幸の際に小村と共に御前講義を為すの榮誉を荷つた杉浦、長谷川、南部の三氏は、この日悵然棺前に並坐し、共に今昔の感に堪えざるものゝ如く、頻りに暗涙の催すのを禁め得なかつた。式終つて棺は同地共同墓地内に埋葬せられた。飢肥の大儒息軒の外孫、第一高等學校教授安井小太郎氏が墓誌を撰した。その末段に「遭朝廷委卑之重、蹇々致身、不為毀譽得喪交其計、而持己廉潔、在重職十余年、家無余財、積勞致病、竟不起、痛哉」といえる。言簡にして情逼るの感がある。封塋十有余坪、家門は筑波の稲田石、墓石は摂州六甲山の花岡石、宮内官高島張輔氏の筆にて単に「侯爵小村寿太郎墓」と銘したのは、故人の真率素樸を示すに於て憾がない。墓石の周囲には、国外の弔慰者から贈つた樹木数株、年々緑を加えて泉下の靈を慰むるものゝ如く、また備前の万成石にて作つた正門の鳥居とタスカン・オーダー式の擬宝珠を戴く左右の燈籠とは、小村の一年祭に際し外務省高等官一同の献納したものである。郷里飢肥の五百祀祠境内には、別に小村の遺髪を分葬した墓塋がある。

原敬も葬儀に参列したが、同日の彼の日記に「小村遂に死去し本日葬儀を営みたるに因り臨場したり彼も失意の時代は多かりしが陸奥伯彼を引上げて清國の一等書記官となしたるより運を開き官僚系の重用する所となりて遂に侯爵にも陞りたるは彼に取りては幸運の事と云ふべし」とある。明治八年文部省留學生として渡航してより没年に至るまで、実に小村の官歴は即ち小村の生涯の履歴に他ならなかつた。明治期の純粹なる官僚の運命を小村の生涯は表徴しているのである。果して藩閥が小村壯年の日の語の如くシャドウに過ぎなかつたかどうか。明治天皇は小村の薨去後時に「小村が居らば」との言葉を洩らし給うたこと、桂は一再拝聆したとか。乃木將軍殉死後、頭山滿が客に「先帝には小村を先供に、乃木を後供にせられて御満足でせう」と語つた。小村・乃木という代表的な文武の官僚を先後供とした明治天皇を語る国士頭山滿、まさに明治史を結んで相應しい光景である。